



からしだね

2015年
11月号 (510号)

キリストの受難 カトリック池田教会

共同宣教司牧：畠 基幸神父・松本 一宏神父

協力司祭：デニス・マックゴワン神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL : 072-751-2400 FAX : 072-753-4624

URL(ホームページ) :

http://www.wombat.zaq.ne.jp/catholic_ikeda/



しばた

新発田カトリック教会(新潟県新発田市在) 教会の紹介文は5ページ

| | | | |
|---------------|---|------------------|---|
| 巻頭言 | 2 | 初代主任司祭 カール神父のこと | 3 |
| 黙想会のお知らせ | 5 | 新発田カトリック教会 | 5 |
| 11月のガラスケースの言葉 | 5 | 知的にハンディを持つ方々の共同体 | |
| | | ドレミの会の23年 | 6 |
| 宝塚黙想の家から | 7 | | |

表紙写真 撮影: 榎場久雄

※聖堂入り口で配布しているものからの抜粋版です。

完全版をご希望の方は、お近くの広報委員までお問い合わせください

巻頭言

けがれたイエズスさま

デニス神父

聖金曜日に使われた大きな十字架は、アメリカのヒラリー神父さまがつくったのです。(そのときわたしは神学生だったので、すこーしだけ手伝いました) それまでに黙想会で使われていた十字架は、重すぎてひとりで運ぶことができませんでした。

十字架は木でできていて、キリストの体は石膏でできています。分解すると大きなトラックに入りました。しかしヒラリー神父さまはいろんな材料と作り方を研究したので、分解するとスーツケースにきっちり入るのです。ひとりで運ぶことができました。少ししかつくられず、数も限られていましたが、池田教会と売布、東京の黙想の家、それに宗像にひとつずつあるのです。実はもうひとつありました。ところが、その十字架はペンキがひび割れしていたので、新しくしようとなつたわたしはあるカトリック工房に送りました。しかし約束の日がすぎても持ってこないから電話しました。返事に驚きました。大阪に十字架を持ってきたけれど、間違った教会に持ってゆきました。そして誰もいないから祭壇のまえに置いて帰りました。手紙も説明もなかったのです。その教会の神父さまに電話したわたしは、ショックを受けました。“十字架を見つけたときに変なはずらだと思いました。イエズスさまの体がバラバラだから、気持ちが悪い。だからゴミに捨てました”と相手の神父さんは言いました。“ひどい！キリストの体がバラバラになってひとつひとつ袋に入れられ、ケースにあわせて上手に入れてある、しかもきれいに新しく塗装されている。なんとひどいことだ”と思ったのです。

しかし最近、もっとひどい写真を見ました。シリアの戦争から逃げるため、高いお金を払ってひとつの家族がゴムイカダに乗って逃げ出しました。高い波のためイカダは転覆しました。お母さんと小さい男の子が二人亡くなりました。お父さんだけが助かりました。あとで一人の子どものなきがらが流され、砂浜で見つかりました。棄てられた人形見たいです。棄てられたイエズスさま見たいです。イエズスさまがおっしゃったでしょう、そういう小さいものにしたことは、わたしにしたことです。良いことも、そして悪いことも……………

難民を受け入れる体制が国によってずいぶん違います。あぶない旅行のあと、三千人以上が海で亡くなりました。無事にヨーロッパに着いた人たちも、あとが大変です。フェンスと警察とを使って、難民受け入れを止めている国があります。日本はお金だけはあげる、けれども難民を受け入れない。ドイツの首相メルケルは80万人を受け入れると約束しています。しかし、オーストリアは10万になるようです。ドイツの国民について良い表現があります。「ウェルカム・カルチャー」という表現です。

こういう問題にキリスト信者の私達は無関心ではいられない、と思います。第一の理由は、この人達は苦しんで棄てられた民族だからです。もうひとつ理由があります。イエズスさまの先祖アブラハムと彼の家族は難民としてカナーンの地に入って、その家族

から救い主イエズスさまが生まれ、そして赤ちゃんのときにヘロデ王がイエズスさまを殺そうとしたから、難民になってエジプトに避難することになりました。

わたしも移民の家族だから関心があるのです。わたしの父の親は新しい生活を見つけるため、アイルランドからアメリカに移民しました。わたしの母も6歳のときに家族といっしょにスロベニアからアメリカに移民しました……そしてニューヨークで船から降りたときに荷物は全部盗まれたのです！

初代主任司祭 カール神父のこと

畠 基幸神父

池田教会の教会案内に必ず紹介されるのは、門を入れて右にあるカール記念館のことです。1991年に信徒会館が竣工した時、初代主任司祭カール・シュミッツ神父の殉死を記念するために名付けられたのです。それから24年経ちました。カール神父を直接知る信者の方々もかなり高齢になりました。その人柄と生きざまは、池田教会の原点に大きな影響を残したことをもう一度思い起こす必要があるように思いました。

1988年4月7日復活の木曜日にカール神父は一人の部族の青年の凶弾に倒れたというニュースが入り、当時の主任司祭國井神父は、大きな悲しみを池田教会の信者に知らせ、神父の追悼ミサを捧げました。カール神父は、1952年、マテオ・ベッター神父と二人で来日し、半年後さらに三人の宣教師が派遣されてから、雲雀ヶ丘の古い校舎を改造して修道院として宣教活動を始めました。1955年12月に大阪教区から委託を受けて豊中教会から分離して現在地に池田教会が発足しました。初代主任として就任したカール神父は、非常に明るく、交際好きで、優しい性格、当時の神父を知る信者は、イエスを愛すること、互いに愛し合うこと、そして人をゆるすことという決まったテーマの説教で、いつもゆっくり体を動かしながら話すカール神父の姿を思い出すそうです。1959年パウロ神父が主任司祭、デニス神父が助任になったとき、カール神父は九州へ赴かれました。当時のカール神父を知るデニス神父の話によると、カール神父は、優しい性格だけれども、非常に頑固と言えるぐらい一度思いこむと決してそれを手放さないところがあり、それが人と衝突することもありました。しかし、これは、良い意味で正しいと信じたら最後まで粘り通す強い性格を持っておられたのです。

カール神父は池田教会を発足する前と発足後の計7年間に多くの人を洗礼に導き、発足後の4年間には児童館（当初は保育園舎と命名）を設立することに力を入れました。1958年4月、ウイチタの聖ヨゼフ修道女会のシスター3名を迎えて児童館が始まりました。ウォード神父によると、幼児を抱えた働くお母さんたちを助けるのが最初の構想だったとのこと。ところが時代はまだ、幼児を抱えたお母さんが働くという発想

はまだなかった時代でした。その後、児童館よりも幼稚園ブームが起きました。この点は、デニス神父は別の意見を持っておられ、当初から幼稚園を宣教の拠点にしたかったが、近所の幼稚園が反対したので児童館になったと説明されます。しかし、カール神父のその生涯の軌跡を知ると、ウォード神父の見方がより真実に近いように思います。

カール神父は、貧しい人々に寄り添うことを神の国の優先課題にしておられたのです。米国御受難会で叙階されて最初に任命された派遣先は、南部アラバマ州の黒人のための御受難会の小教区でした。1950年代から1960年代にピークに達した公民権運動(civil rights movement)より少し前、1945年から1947年まで、カール神父は、その小教区で働き黒人の人たちの立場に立ち、人間的な交わりを大切にして、例えば、野球観戦に一群の信者を連れて白人だけに許された観客席に入り平然と黒人たちと一緒に観戦したりした逸話を残しました。その小教区での神父の優しい性格と福音に忠実に人々に寄り添う姿は、中国での宣教、日本での宣教、そしてフィリピンでの宣教の中にも発揮され、カール神父は、自らの福音を生きる道として、最も助けを必要としている人、貧しさのために苦しむ人たちを最優先していたのです。

1970年代になると日本は戦後の復興期を脱して次第に豊かな社会という安定した成長期に入りました。カール神父はすでに60歳になり、ご自分が貧しい人に奉仕できる最後の居場所を求めて、フィリピン管区での宣教地、ミンダナオ島の少数山岳部族のミッションに志願されたのです。カール神父は、ビラアン(B'laan)族の居住地全体を包括する宣教司牧の責任者に任命され、14名のカテキスタを配下に、ビラアン族の生活を守り維持することができるように、アジア財団とも手を結んで、教育や職業訓練や医療衛生などの信仰を伝える以前の社会生活のイロハを教えるプロジェクトを企画して実施していました。ばらばらに点在する部族の村々を一回りするだけでも数カ月を要するミッションは大変な労苦でした。

1988年4月7日、企業と政府が結託して部落の貴重な生活資源である森林を伐採する計画を知ったカール神父が、森林伐採反対キャンペーンを展開したため、軍は神父に共産主義者のレッテルを張り、不満を持っていた部落の青年に銃を与えて殺害させたのでした。

2006年御受難会のフィリピン管区は、カール神父を殉教者として列福するように教皇庁に列福請願の手続きをとり、現在列聖調査中です。

以上のように、カール神父の生涯にはっきりと見えてきた貧しい人を優先する生き方は、イエス・キリストのご受難を基盤にした御受難修道会の霊性と重なり、「御受難」のタイトルを持つ池田教会の霊性と将来の発展の方向を示しているとの思いを抑えることができません。皆様はどのように思われるのでしょうか？



黙想会のお知らせ

11月22日（王であるキリスト）に待降節をむかえるにあたり、『終末に臨んで』というテーマで黙想会を開催します。

ミサ司式・講話は、六甲学院理事長 赤松廣政神父様（イエズス会）です。

研修委員会



新発田カトリック教会

丸太造りで円形のユニークな建物で、昭和40年建設、設計はチェコ人のアントニン・レーモンド。彼は世界的な建築家フランク・L・ライトの弟子で、戦前から戦後、日本で活躍した。

なお、カトリックの教会は、現在「カトリック〇〇教会」となっているのが一般的ですが、表紙の教会名は、現地での表札のままで表示しました。

11月のガラスケースの言葉

神は悩みのうちにある者を支え
倒れる者をすべて立たせてくださる



詩編 145の14

知的にハンディを持つ方々の共同体「ドレミの会」の23年

知的にハンディを持つ方々の共同体「ドレミの会」は23年前、当時の主任司祭の国井神父の指導によって始まりました。「ドレミの会」を精神的に支えるのは、フランス人のジャン・バニエ氏によって1971年に創始された共同体「信仰と光」の精神に準じ、次のように要約されます。

「すべての人は神によって平等に愛されている」という信仰を心に抱き、どんなハンディの重い人も、人間として愛され、尊敬され、自分の居場所と価値を見つけ、選択の自由を与えられ、人間的に成長するために必要なものを得る権利を持ちます。

それが実現するような暖かい環境を一緒に作ってくれる友人たちに出会い、集まって、自分以外の苦しみや喜び、才能を発見し、お互いに名前呼び合える、親しい人間関係を築きます。

精神、知能にハンディを持った人々と保護者と神父、友人であるスタッフは、定期的集まって、祈りながら、様々な行事を共に過ごし、自分たちの苦しみと喜びを分かち合い、ハンディを持った人々が成長するのを支援します。

1993年に発足した当時は国井神父とハンディのある5名とその保護者と信者のスタッフの参加でしたが、以来今日に至るまで、毎月第2土曜日に池田教会カール記念館1階ホールでの例会を一度の休みもなく続けて参りました。現在は、ロコミで参加者も増え、34名のハンディを持った方々とその保護者、池田教会の司牧チームとスタッフの計60名が共同体を作り、心を共有できる音楽を中心にした集いで、心の交わり 苦しみと喜びの分かち合い、を持ちます。

20名近いスタッフの半分は池田教会と日生中央教会の信者、残りの半分は教会に籍のない方々です。スタッフはハンディのある方々の友人として、心を一つにして楽しい時間を共有しています。ボランティアとして参加する方々の中には、ダンスの二人の先生やいろいろな特技を披露し、皆を喜ばせてくださるゲストの方々が居ります。それらの方々は、ハンディを持つ方々の持っている、心の単純さ、謙虚さ、素直さ、習慣にとらわれない自由さ、やさしさに心癒され、いつも元気をもらっています。

運営資金は池田市から頂く助成金(毎年削られています)と参加者の自主カンパで、収支はぎりぎりといったところです。「会費をとったら？」との声も聞きますが、身寄りのない方、片親、生活保護などいろいろな環境の中で生活している方のこともあり、誰でもが安心して参加できるようにと会費は決めていません。

22年間も続いてきましたのも、神父様たちの理解と応援、池田教会のたくさんの方々の協力があったことと、いつも感謝しています。いつまで続けられるか〜それは神の御心のままです！

知的にハンディを持つ方々の共同体「ドレミの会」の趣旨とこれまでの歩みをご報告するために、「からしだね」の紙面をおかりしました。これからも、池田教会の方々から、これまでと同様に暖かいご協力を頂けたらと思います。

宝塚黙想の家から 黙想会のお知らせ

■日帰り黙想会

11月19日(木) 10:00 ~ 15:30 指導：山内十束神父

11月20日(金) 10:00 ~ 15:30 指導：山内十束神父



各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。

☎0797(84)3111

編集後記

「基礎年金」支給開始の歳になった。65歳開始というのは絶妙。還暦を迎えたときはそう感じなかった。だが根気がなく、ここいちばんの踏ん張りが効かず、歩くのが億劫になるなど、いずれも5年まえとは違うのがはっきりしてきた。もっとも愚痴ではない。これまでを振り返ってただ感謝、感謝である。大病もなく元気で勤務できた。定年も目前。生かされてきた、動かされてきたのを実感している。ありがたい。畏れ多い。神さま、このさきもよろしく。すべてを任せて生きることの楽しさ。あれこれと自分で決めて、がむしゃらに努力する必要もない。ゆだねて生きることが選ぶことの重荷から解放された自由を保障してくれる。洗礼を受けてよかった。(直)

